音楽部会

“音楽すること”から　ひろがる・深まる

１　研究の内容

本校音楽部では，長年にわたり，小学校６年間の学びを長いスパンで捉え，発達段階や縦のつながりを考慮しながら題材を設定している。年間を通して，帯単元で授業を展開していることも特徴の一つである。一人ひとりの音楽が存在し，繰り返される音楽活動の中で，触発されながらそのカタチを大きくしていくと捉え，実践を通して子どもの姿を追っている。

「“音楽すること”からひろがる・深まる」という研究テーマは今年度で４年目になる。

①「あそぶ・選択する」ことの中から育まれること

② 様々な楽器や音に出会うことで，個の音楽観の変容を追うこと

③ 自分の音楽とは何か，考え表してみることの３点を，子どもの活動を通して多角的に分析をしてきたが，今年度は，制限が多い中での研究となっている。感染症対策から，活動が制限される中で，本年度は，４年生から始まる活動である，自分や友だちの音楽と向き合う時間「Music　Map」の活動を通した分析をまとめたい。

（１）“音楽すること”とは

ニュージーランド出身のクリストファー・スモールが提唱した，「musicking」[*1]（以下カタカナで記す。）という考えがある。スモールは，このミュージッキングを，音楽する（to music）という動詞の，動名詞形であると定義している。「音楽する」とは，どんな立場からであれ音楽的なパフォーマンスに参加することであり，これには演奏することも聴くことも，リハーサルや練習も，パフォーマンスのための素材を提供すること（つまり作曲）も，ダンスも含まれる。とスモールは言う。まとめると，各自の立場を問わずに音楽的なパフォーマンスに加わるすべてのものが,「音楽すること」なのである。チケットの売り子や，掃除係など，裏方まで，その場に集うすべてのものが音楽に参加し，音楽を共有し，音楽に貢献しているという考えである。

本校では，この，スモールが提唱するミュージッキングの考え方，特に，立場を問わずに音楽的な活動に参加していく事こそが，自分の音楽をより豊かなものにできると捉えている。その上で，学習環境を整え，子どもたちの表現が行き交う場の設定を工夫している。

（２）ひろがる・深まる“音楽すること”

次の三つの観点を設定し実践・分析・省察していく。

Ａ：たくさんの音楽が混在する場で，自分の音楽を新たなものにしていこうとすること
Ｂ：自分（たち）の“音楽すること”を客観的にみつめ，豊かにしていこうとすること
Ｃ：友だちの音楽を聴いたり，考えを知ったりすることで，気づくこと・気づかされること

以上の観点のもと，子どもたち自身の学習活動の省察を通して，検証していく。方法としては次に挙げる２点を中心に検証していく。

① 子どもの活動を動画で記録し，考察する。　② 活動の記録や個人の振り返りから分析する。

また，教師も子どもと同じ場にいる１人の表現者として，その場その時の音楽をともに楽しみ，自らの音楽を見つめ直す姿勢を大切にしていきたいと考える。そのような営みの中で，ひろがりや深まりを見とっていきたい。

（３）学びをあむ過程こそが豊かな音楽を生み出していく

一人ひとりの表現は異なる。異なった表現が行き交う空間だからこそ，自分自身の音楽も新たなものとして育っていくだろう。そのような環境の中，一人ひとりの違いを，子ども自身がどう受け止め，どう整理して，自分（たち）の音楽として，新たなものとしていくのか。この過程こそが，大切なのである。この過程の積み重ねが，音楽ならではの学びをあむ姿と言って良いのではないかと捉え，実践を継続している。

（2019 年度発表要項一部再掲）

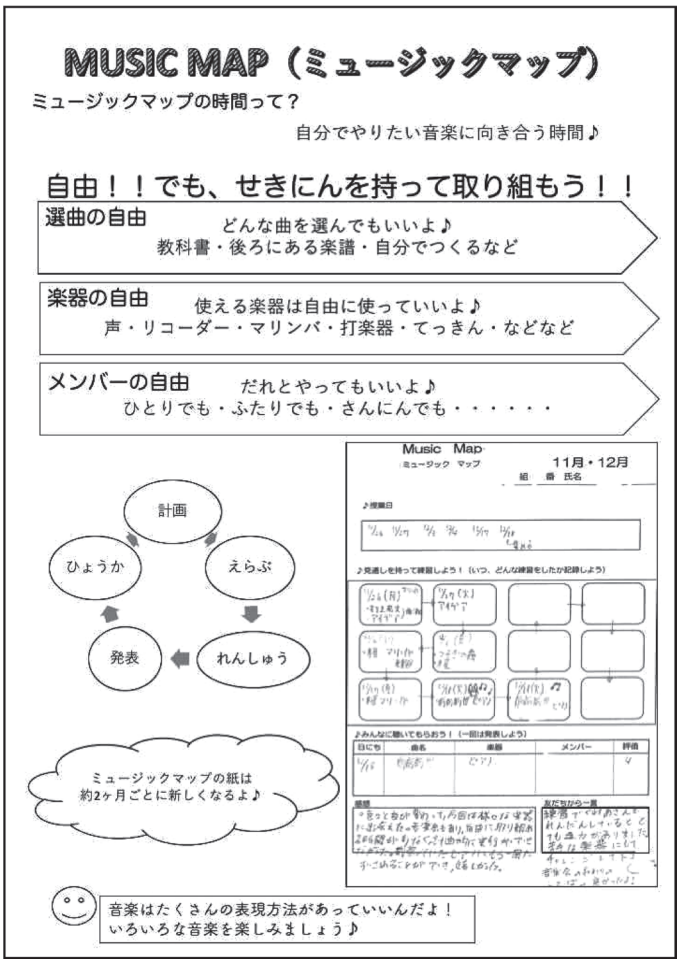
２　授業実践からみた子どもたちの学ぶ姿

【MUSIC　MAPの時間とは】

４年生から６年生では，自分たちで音楽活動を計画し，実行していく「MUSIC　MAP」の時間がある。この時間は，自分の音楽を追求する時間と言ってもよい。自分の音楽活動をマッピングし，マップを見直す中で，修正をかけることもあれば，さらに深い学びを探ることもある。一人ひとりのマップが，大きな学習材に変化することもあるのだ。１時間の中の学びを，少しずつ形を変えながら次時に活かして活動していることもわかっている。

４・５年生では，様々な音や楽器に触れる機会を多く設ける。その中で，自らが音楽と向き合い，試しながら楽しむ姿が多く，次第に自分のこだわりを見つけていく。

６年生になると，楽器選択の幅も広がり，ドラムやギター，三線などに興味を持ち始める子が多数出でてくる。たくさんの選択肢の中から，自らが音楽と向き合い，試行錯誤しながら進めていく姿が多く見られる。次第に自分の追求すべきものと出会い，没頭する姿が多い。また仲間とともに奏でる喜びや，難しさを，その時その場にいる仲間とともに共有し，さらなる活動へとつなげていく姿もある。



（１）新たな環境での学びのスタート　～やってみることからひろがる～（４年生）

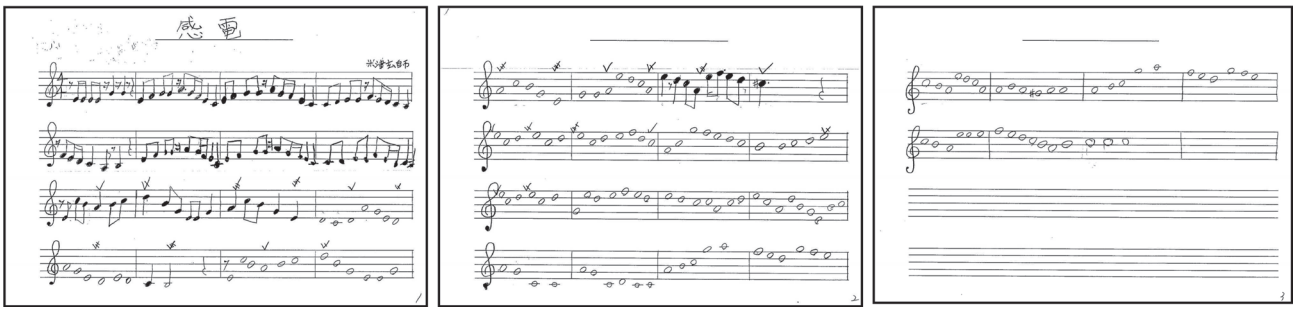
４年生になると，学習場所がスタジオからアッセンブリホールに変わる。スタジオに比べると２倍の広さがある。アッセンブリには，多様な楽器があると同時に，「MUSIC　MAP」の活動も始まる。子どもたちは，新たな環境での学習に意欲的である。そして，低学年の時に上級生が演奏する姿を様々な場面で見ているためか，憧れていた姿と重ね合わせているようにも見てとれる。

アッセンブリホールにある楽器は，原則自由に使うことができる。マリンバやキーボード，ピアノを始め，ミュージックベルやトーンチャイム，諸外国の楽器や打楽器も環境として整えている。

さて，子どもの様子を紹介する。新学期当初，多くの児童は，「試す」ことから始めていた。見よう見まねで楽器と関わる姿が多かった。次第に，練習する過程で様々なことを習得していく姿が，特に４年生は多く感じられた。それは，仲間がいるからこそできる，学びの一つと言えよう。「まずはやってみよう」という姿から，次第に自分のものとしていく様子が伺えた。４年生は発表の数も非常に多い。毎時間平均５個の発表がなされた。発表を重ねる中で，仲間からアドバイスをもらい，次の表現に活かしていることも多いのである。学校音楽は演奏の技術だけを教え込む場ではない。仲間とともに表現する楽しさを味わいながら，少しずつ成長していく「その子の音楽」を教師は見守っていきたい。

（２）自分の楽譜を創っていく　～実際に音にして，確かめながら～（５年生）

B（男児）はキーボードやピアノなど，鍵盤楽器に興味を持っている。そして，自分の好きなアーティストがいる。そのアーティストの楽曲を自分でも取り組んでみたいという強い思いを持ちつつ，活動しているように見てとれた。家で，母親に途中まで五線譜を書いてもらい，それを再現しながらの取り組みが続いた。Bのからだには，その楽曲が入っている。実際に自分で音にしてみると，「うーん，なんか違うんだよなぁ。こっちの音の方が近いんだけど・・・・」と，確かめながら自分の楽譜を創りあげていったのである。（下の楽譜参照）



このように，自分の耳を駆使し，自分のイメージしているメロディとすり合わせていった経験は，彼にとって，この先の音楽活動の一助になるに違いない。

（３）鑑賞から創作へ　～「つるぎのまい」の鑑賞から創作活動へ～（５年生）

分散登校時，「つるぎのまい」の鑑賞活動を行った。そこから，楽曲に興味を持ったM（女児）。楽譜がほしいとのことで，スコアを渡すと，マリンバでメインメロディパートの練習に黙々と取り組み始めた。それを近くで見ていたK（男児）。Mに教えてもらいながら，２ヶ月近くともに奏でる姿があった。同時にKに触発されたのか，Kのとなりには A(男児) が居るようになった。３人がお互いに学びあって，高めていく様子が見てとれたのである。そのうち，KとAがこだわりを持ち始めた。２人だけでマリンバに没頭し，さらに，そこに打楽器を付け加えようと試みたのである。そこに参加してきたのが，C(男児) であった。どのようなリズムで，打楽器を加えようか。どのタイミングで，どんな音で加えようか，お互いに試しながら話しあいを重ねていった。クラスのみんなに発表するたびに，様々な感じ方や捉え方があるということが本人たちに伝わったようで，毎時間変化のある発表を重ねていった。

その後Kはさらにこだわり続けた。そして打楽器で参加していたCとともにマリンバで，創作を始めたのである。「つるぎのまい」の冒頭部分をモチーフとし，創作を続けた。右手で，モチーフの部分を続け，左手で，半音の動きをつくり，いくつかの展開を考えていった。彼らなりの楽譜を作成し，構成も考えていたのである。先に述べた，「音楽することがひろがり，深まった」ひとつの事例と言うことができるのではないか。（創作した楽曲は，当日紹介予定）

（４）自分たちで考え，自分たちの音楽表現を追求する（６年生）

６年生になると，使用できる楽器の種類が増える。代表的なのが，ドラムセットとギターである。また，今年度より電子ドラムも導入した。ずっとやりたくて待っていた楽器の解禁に，興味を持つ子が多い。しかし，いざ楽器を触ってみると思い描いていたものとは異なり，戸惑いを現す姿も多いのが現実だ。まずは触ってみる，という姿勢を大切にしている。繰り返すことから，徐々に自分のものとしていく。ギターに興味を持ったK(男児)。コードの押さえ方の一覧表を頼りに，それぞれのコードを確認していた。弦をピックで弾くが，弦を抑える力が弱いのか，うまく響かない。この繰り返しがある程度続いたが，徐々に音

が鳴るようになってきた。ひとつのコードを習得するまでにかなりの時間を要した。ひとつのコードが鳴らせるようになると他のコードへの興味もわいてきたようだ。このようにひとつの興味から更なる興味をとつながっていく姿は，自分自身の音楽観をより豊かなものに導いていると捉える。そして，自ら高めていくのである。また，練習中に他の楽曲が聞こえると，そのリズムに合わせストロークする姿もあった。これは多様な参加形態のひとつだと考える。

マリンバに４年生の頃からずっと取り組み続けている子も多い。友だちが演奏する姿をじーっと見つめ演奏してみる。次第に腕の使い方や，マレットの運び方も変わってきた。友だち同士でアドバイスし合いながら，お互いに高めあっていくのだ。これは他者がいる学校という場でだからこその学びの姿と言えるのではないか。没頭し繰り返すことから，音楽がより豊かなものへと変わっていくのである。

ここで紹介するのは，あるクラスの合奏の様子である。マリンバやピアノで，「紅連華」を演奏しているグループがあった。それを聞きながら，エレキギターや，エレキベースに取り組んでいたＫとＩ。参加したそうな様子が伺えた。「紅連華」で用いられているコードをみてみると，実に少ない数のコードで構成されている。Ｋに，パワーコードの存在を紹介すると，瞬く間に楽曲に合わせて演奏をしていた。同時に，ベースも押さえる位置を紹介すると，黙々と練習を始めた。また，Ｍからドラムを入れたいと相談があり，ドラムに毎時間没頭していたＯのところに行くよう，声をかけた。ＯはＭにリズムを提案し，たたき方を教えていた。このように，子ども同士で学びあう場をなるべく多く設定し，高めあって行く姿を期待している。

発表では，15 人程度のメンバーが，息をあわせ，聴衆からの評価も高かった。（動画で紹介予定）

【紹介】からだをつかって音楽する（低学年）　　※今年度は，感染防止のため実践できていない。

低学年では，からだ全体で活動することに重点を置いている。あそぶという活動を通して様々なことを学んでいく。低学年の時に，からだを通してたくさんのことを経験したからだは，高学年になって柔らかいからだに育つことが，過去の実践からも明らかになっている。高学年においての多様な音楽を受け入れたり，自分との異なりを受け入れたりと，音楽そのものを柔軟に受け入れることが出来るからだに育つのである。

～わらべうたあそびを通して～

入学して間もない子どもたちは，初めて出会う仲間たちとどう関わればよいのか不安に思っている子どもも少なくない。わらべうたあそびを通して，手をつなぎ，声をあわせ，みんなで関わることで，楽しいという思いだけでなく，安心感も生まれていると考えられる。その安心感をまずは大切にしながら，間違うことを恐れずに楽しみながら回数を重ねる。子どもたちの吸収力はすさまじく，回数を重ねるごとに，声も動きも表情も豊かになる。わらべうたあそびでは，導入当初はクラス全体で遊べるものから始め，徐々にグループでのあそびや少人数のあそび，人当てのあそびも取り入れていく。遊びの種類が多くなると，教員が提案したグループ（ファミリーが２～４つ（毎回変える））で，なにで遊ぶか相談し，遊びを決める。そこでは，自分の思いのみを伝え続ける子，みんなの意見をとりまとめようとする子，相手に譲る子，いろんな子どもたちがいる中で，相談し自分たちで決め，決めたことを思いっきり楽しむということを大切にしている。そこではずっと決まらず遊べないことや，涙を流してしまうこともある。そのように，教師が決めたあそびを子どもがただやるのではなく，自分たちで決め取り組むことで意欲が芽生えることと共に，うまくいかないことへの葛藤を覚え，折り合いをつけることを学んでいく。他者がいることを意識する上では，大切な経験と言える。授業の終わりには困ったことや，うまくいったことを全体で共有し，全体の問題として取り上げることで，自分事としても捉え直すことができる。

３　今後に向けて

繰り返しになるが，今年度は制約の多い中での実践となった。文部科学省からも感染防止対策の通知が来ているように，音楽科の活動は非常に困難を強いられた。従来当たり前のように展開されていた，歌うこと，リコーダーを演奏することが飛沫感染防止のため，制限された。

一方で，本校で長年実践してきた，自分の音楽と向き合える時間は，十分に保障できたと言える。子ども達は，制約の多い中で，今できることを見つけ出し，そこから，自分の音楽と向き合うことができたのではないか。また，お互いの表現を受けとめ合う中で，他者がいる教室空間だからこその気づきや学びも多くあった。こだわり続けることから音楽的高まりが期待できることが，実践から明らかになりつつある。今後，新たな学校音楽のあり方の一つとして，提案できればと考えている。　（下田・町田）

[*1] クリストファー・スモール，野澤豊一＋西島千尋訳（2011）『ミュージッキング』水声社